

地域言語・方言

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-02 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24517/00000105

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



地域言語・方言

加藤和夫

1. はじめに

編集委員会の意向で今回の展望から、従来の「方言」という分野名が「地域言語・方言」に変更された。従来、「地域言語」と「方言」が明確に区別されているとは思えないし、むしろ同義に近いとも考えられるが、「方言」が一般に伝統的方言としての日本語の地理的変異＝地域方言 (Local Dialect) をさすことが多いとすれば、それらが衰退し、変容している中で、「地域言語」とは、地域社会のことばの社会的変異＝社会方言 (Social Dialect) をも含んだ広い概念とひとまず考えておくことにしたい。

ところで、新世紀の本格的スタートにあたった今期 (2002年・2003年) も、「地域言語・方言」分野の著書・論文等の量は相当の数に上り、内容も多岐にわたったが、中に、日本方言研究会編『21世紀の方言学』(国書刊行会, 2002.6)があった。日本方言研究会が第70回研究発表会 (2000.5) で開催したシンポジウム「世紀をわたる日本方言学」のパネリスト5名を含めた59名の執筆による論文集で、20世紀を振り返り、21世紀の方言学を展望する本書は、新たに方言研究を志す人にとっても、わが国の方言研究の到達点と今後への課題を知るのに便利な概説書となっている。

以下では、今期のこの分野の研究文献を、「記述的・総合的研究」「音韻・アクセント・イントネーション」「語彙」「文法」「社会言語学」「方言地理学」「その他」の七つのジャンルに大きく分けて見ていくことにする。

2. 記述的・総合的研究

方言の衰退、消滅の危機が叫ばれる中、日本語諸方言の記録・保存を強く意識した記述的研究の多さが、何と言っても今期の大きな特徴だったように思う。そして、文部科学省特定領域研究「環太平洋の「消滅に瀕した言語」にかんする緊急調査研究の日本班 (代表：真田信治)」の諸成果が、それを象徴するものであった。2000年に始動したこのプロジェクトは、今期に成果報告書の多くが公にされた。文法関係で研究代表者の真田信治編『消滅に瀕した方言語法の緊急調査研究 (1)』(2002.3)、同編『消滅に瀕した方言文法の記録——天草方言・由利方言——』(2002.12)、音韻関係で佐藤亮一編『消滅する方言音韻の緊急調査研究』(2002.12)、アクセント関係で上野善道編『消滅に瀕した方言ア

クセントの緊急調査研究3』(2002.10), 語彙関係で小林隆・篠崎晃一『消滅の危機に瀕する全国方言語彙資料』(2003.3), 琉球方言関係で狩俣繁久・津波古敏子・加治工真市・高橋俊三編『消滅に瀕した琉球語に関する調査研究』(2003.3), 津波古敏子・上村幸雄編『危機に瀕した沖縄諸島方言の緊急調査研究』(2003.3) などがあつた。いずれも21世紀初頭の日本語諸方言の貴重な記録である。

県単位での方言を扱った概説書・方言語彙辞典として評価の高かつた秋田県教育委員会編『秋田のことば』(無明舎出版, 2000.10)のCD-ROM版, 秋田県教育委員会編『CD-ROM版 秋田のことば』(同, 2003.7)が刊行された。マルチメディア時代を見据え, 県教委と県内の国語教師, 研究者, 地元の出版社が連携してCD-ROM版までも廉価で刊行するという秋田県の取り組みは, 全国的に方言見直しが進む中で, 今後この種の企画の手本とされるべきものだろう。

平山輝男他編「日本のことばシリーズ」(全48巻, 明治書院)は, 中田敏夫『静岡県のことば』(2002.7), 佐藤和之『青森県のことば』(2003.7), 中井精一『奈良県のことば』(2003.7), 藤田勝良『佐賀県のことば』(2003.10)の4県が刊行された。

馬瀬良雄『信州のことば 21世紀への文化遺産』(信濃毎日新聞社, 2003.6)は, 豊富な調査資料に基づく専門的記述と, 一般読者にも受け入れられる豊富な話題と平易な記述がバランス良く配された長野県方言の優れた概説書, 案内書である。「21世紀への文化遺産」というサブタイトルに著者の方言記述への思いが込められている気がする。

日本語諸方言の記述を統一的な方法で継続している大橋勝男には, 今期新たに「日本語諸方言についての記述的研究(41)——埼玉県比企郡小川町古寺方言について——」「日本語諸方言についての記述的研究(43)——滋賀県神崎郡能登川町乙女浜方言について——」(『新潟大学教育人間科学部紀要』4-2・5-2, 2002.2・2003.2)ほかがあつた。

談話資料としての, 国立国語研究所編『全国方言談話資料データベース 日本のふるさとことば集成』(国書刊行会)は, 今期『第12巻 奈良・和歌山』(2002.2), 『第13巻 大阪・兵庫』(2002.4), 『第4巻 茨城・栃木』(2002.7), 『第5巻 埼玉・千葉』(2002.10), 『第6巻 東京・神奈川』(2003.1), 『第7巻 群馬・新潟』(2003.3)が刊行された。担当者によれば, 今回のシリーズに収録できない分(地点)については, 「方言談話データベース」として活用できるよう電子化の計画を進めているという。また, 談話資料の記録を精力的に続けている山口幸洋には, 「愛知県方言談話資料(13) 知多郡南知多町篠島方言」「愛知県方言談話資料(15) 渥美郡赤羽根町若見方言」(『faqua』30・32, 2002.6・2003.6), 「岐阜県方言談話資料(1)(2)」(『名古屋・方言研究会会報』19・20, 2002.6・2003.6)ほかがあつた。

藤原与一『日本語方言辞書 別巻——全国方言会話集成——』(東京堂出版, 2002.9)は, 「全国五十七要地点」調査で採集された多くの会話文例が文アクセント・話し手の情報等とあわせて地点ごとに載る。一個人による記録という点で貴重な資料である。

大学の共同研究には、小林隆編『宮城県石巻市方言の研究』（東北大学国語学研究室，2003.7）や東京都立大学国語学研究室による山梨県道志村方言，山形県三川町方言の総合的・社会言語学的調査報告（『日本語研究』22・23，2002.4・2003.4）があった。

さらに、琉球方言の記述にも精密な研究が多く加わった。以下、各ジャンルの中で取り上げるものもあるが、総合的記述には、内間直仁『沖縄県宮古・八重山方言の調査研究——伊良部島長浜・西表島祖納方言を中心に——』（科研成果報告書，2002.3），同『沖縄本島国頭方言の調査報告』（科研成果報告書，2003.3）などがあった。

3. 音韻・アクセント・イントネーション

音韻（音声）研究としては、まず大橋純一『東北方言音声の研究』（おうふう，2002.1）が挙げられる。本書については、すでに今石元久「〔書評〕大橋純一著『東北方言音声の研究』（『国語学』54-3，2003.7）があり、詳しくはそれに譲るが、豊富な臨地調査資料に基づいて、東北方言音声を多角的・総合的に考究した意欲作である。

岩手県内方言の動詞活用と音韻・音声規則をまとめたものに、齋藤孝滋「岩手県盛岡市方言における動詞の所謂終止・連体・準体・禁止・推量志向形と音韻・音声規則」（『国学院大学紀要』41，2003.2），同「岩手県一関市方言における動詞の所謂終止・連体・準体・禁止形と音韻・音声規則」（『フェリス女学院大学文学部紀要』38，2003.3）ほかがあり、齋藤には「東北・越後方言における/r/をめぐる音変化」（『フェリス女学院大学文学部紀要』37，2002.3）もあった。

東北方言以外では、九州方言と琉球方言に関するものが大半を占めた。崎村弘文「薩隅方言におけるラ行音・ダ行音の変異について——肥筑方言を参照しつつ——」（『久留米大学文学部紀要 国際文化学科編』20，2003.3），有元光彦「琉球与那国・祖納方言の動詞活用形の語彙音韻論（3）（4）」（『安田女子大学紀要』30，2002.2・『国語国文論集』32，2002.1），有元光彦「九州西部・琉球方言の動詞テ形・タ形に起こる音韻現象についての試論」（『山口大学教育学部研究論叢』53-1，2003.12），大野眞男「奄美方言における中舌母音の歴史的層性」（『国語学研究』41，2002.3），杉村孝夫「八重山波照間方言の動詞の形態音韻論」（『新大國語』29，2003.3）などがあった。

一方、アクセント研究では、今期も優れた記述，研究が多く見られた。

まず、中井幸比古編著『京阪系アクセント辞典』、『同データ CD-ROM』（勉誠出版，2002.11）があった。20年以上にわたる京阪アクセント調査に基づく「語彙編」の、2万項目にも及ぶ精密なアクセント記述は圧巻である。「概説編」「考察編」に示される多くの新たな知見とともに、京阪アクセント研究にとって待望の書が誕生した。辞典の記述の客観的検証を可能にする意味で、CDの出版も貴重である。本書については、佐藤栄作による書評（『音声研究』7-2，2003.8）がある。

伝統的方言アクセントを中心とした記述的研究には、冒頭でも紹介した科学研究「危

機言語」の成果報告書、上野善道編『消滅に瀕した方言アクセントの緊急調査研究3』(2002.10)に載る、上野善道・新田哲夫(石川県金沢方言)、中井幸比古(岡山県寒河方言)、新田哲夫(石川県白峰方言)、大和シゲミ(福井県上中方言)の諸論考をはじめ、田中宣廣「陸中宮古方言アクセントの実相」(『国語学』54-4, 2003.10)、同「東京方言付属語アクセントの記述的研究」(『国語学研究』42, 2003.3)、山田達也「名古屋方言における形容詞の変化とアクセント」(『名古屋・方言研究会会報』20, 2003.6)などがあった。山口幸洋「愛媛県内子町の談話アクセント分析」(『地域言語』14, 2002.10)は無型アクセント地域の談話アクセントの特徴を記述しようとしたものである。

方言アクセントの動態研究には、大橋純一「東北方言の二拍名詞・動詞アクセント——型区別の地理的・年代的状況に即して——」(『いわき明星大学人文学部研究紀要』16, 2003.3)、川上葵「東京アクセント末核型の行方」(『国語研究』66, 2003.3)、小林めぐみ「東京語における形容詞アクセントの変化とその要因」(『音声研究』7-2, 2003.8)、田中ゆかり「首都圏方言における形容詞活用形アクセントの複雑さが意味するもの——「気づき」と「変わりやすさ」の観点から——」(日本大学『語文』116, 2003.6)、鏡味明克「愛知三重岐阜県境の固有名詞アクセントの変化」(『名古屋・方言研究会会報』20, 2003.6)、大和シゲミ「式音調の変化——福井県上中方言の場合——」(『大阪樟蔭女子大学日本語研究センター報告』10, 2002.3)などがあった。

田中宣廣「付属語アクセント研究史」(『岩手県立大学宮古短期大学部研究紀要』14-1, 2003.7)は、我が国の付属語アクセントの詳細な研究史となっており、利用価値が高い。なお近年、段階観が不完全なアクセント観と論じられ、文献アクセント史への批判があることに対する反論として、上野和昭「日本語アクセント史研究とアクセント観」(『音声研究』7-1, 2003.4)があった。

前田広幸「終助詞の階層と接続上の音調特性——現代東京語と京都語の対照——」(奈良教育大学『国文 研究と教育』25, 2002.3)は、今期数少ないイントネーション研究の一つである。現代東京語、現代京都語の終助詞の有する音調の種類と文階層上の分布位置に共通性が見られることを指摘している。

4. 語彙

語彙研究は、他ジャンルに比べれば今期も低調だったと言わざるを得ないだろう。

井上史雄・鎌水兼貴『辞典〈新しい日本語〉』(東洋書林, 2002.6)は、地域のことは日々刻々と変化し続ける中で、日本各地に生まれた「新方言」を集成したもの。新しいタイプの方言語彙辞典の誕生である。巻末の「出典文献一覧」「語形総索引」も利用価値が高い。

伝統的方言を中心に編まれた県単位の方言辞典には、中井幸比古『京都府方言辞典』(和泉書院, 2002.7)、大橋勝男編著『新潟県方言辞典』(おうふう, 2003.2)があった。中

井のものは京都市下全域をカバーする方言辞典として最初のものである。

佐藤祐希子『『気づかない方言』の意味論的考察——仙台市における程度副詞的な「イキナリ」——』（『国語学』54-1, 2003.1）は、仙台市若年層方言の「気づかない方言」である、程度副詞的用法の「イキナリ」の発生と定着が、単に共通語「イキナリ」の意味拡張だけでなく、仙台市若年層方言話者の共通語志向の強さに支えられたものであるとする。

ほかに、性向語彙の造語法を論じた、石川香代子・辻野弘恵「徳島県佐那河内村方言に於ける方言性向語彙の造語法」（大阪教育大学『国語と教育』27, 2002.3）、井上博文「方言性向語彙の造語法——熊本県砥用町方言——」（大阪教育大学『学大國文』45, 2002.3）などがあった。

岡野信子『屋号語彙の総合的研究』（武蔵野書院, 2003.10）は、著者長年の屋号研究の集大成。見野久幸『〈藤田漁場日誌〉に見られる鯨漁撈語彙の研究』（科研成果報告, 2002.7）は、今期唯一と言ってもよい職業語彙の研究であった。

5. 文法

方言の文法研究には、伝統的な方言研究における文法記述の枠を超えた新しい文法理論による研究が多く見られた。現代語の文法研究の進展と深まりの中で、若手の文法研究者たちが共通語だけでなく方言をも研究対象とし始めたことと、新しい文法理論を学んだ方言研究者たちが増えてきたことによるものだろう。

まず、今期もアスペクト・テンス研究が多かった。この分野の研究をリードしてきた工藤真由美に「諸方言におけるアスペクト・テンス体系の動態——存在動詞と時間表現——」（『国語論究第10集 現代日本語の文法研究』, 明治書院, 2002.12）があった。全国38方言の調査結果をもとに、アスペクト体系を0型と3項対立（1型・2型）、2項対立（1型・2型・3型・A型・B型）の8つのタイプに分け、類型論的視点から各代表地点の動詞のアスペクト・テンスについて考察したものである。2項対立型よりも3項対立型が古いなど、いくつかの仮説が提示されるが、それらの妥当性については今後さらに精密な実態調査によって検証される必要がある。高田祥司「岩手県遠野方言のアスペクト・テンス・ムード体系——東北諸方言における動詞述語の体系変化に注目して——」（『日本語文法』3-2, 2003.9）、工藤を代表とする科学研究の報告『方言における動詞の文法的カテゴリーの類型論的研究』No.1（2002.3）、『方言における動詞の文法的カテゴリーの類型論的研究』No.2～No.6（2003.3）もあった。工藤らの研究成果を受け、方言研究の世界では、今後もアスペクト・テンス研究の深まりが期待される。

モダリティ関係の研究文献も多かった。長野県上伊那地方で推量助動詞「一ズラ」に代わって若年層、壮年層で使用される「一ダラ」が、助動詞としての機能の一部を失って終助詞化していることを報告した中村純子「上伊那方言、推量助動詞、一ダラの終助詞化現象——壮年層を中心として——」（『信州大学留学生センター紀要』4, 2003.3）をはじめ、

玉懸元「仙台市方言の『べー』の用法(2)——『推量』『確認』『確認要求』の用法をめぐって——」(『国語学研究』41, 2002.3), 渋谷勝己「山形市方言における命令形後接の文末詞ナ・ネ・ヨ」(『阪大社会言語学研究ノート』5, 2003.3), 高木千恵「大阪方言における断定辞ヤの文末詞的用法について」(『阪大社会言語学研究ノート』4, 2002.3), 神部宏泰「近畿西部方言におけるナ行文末詞——その生態と特性——」(『ノートルダム清心女子大学紀要 日本語・日本文学編』26-1, 2002.3), 村田真美「宮崎方言の『チャ』と『ト』」(『阪大日本語研究』15, 2003.2), 伊豆山敦子「琉球・八重山方言における『行為の認知』と『行為の結果』」(獨協大学『マテシス・ユニヴェルサリス』4-1, 2002.11)などがあつた。文末詞(終助詞), 助動詞を中心としたモダリティ研究は, 各地の方言において明らかにすべき課題はまだ多いはずである。今後期待したい。

用言の活用を扱ったもののうち, 坂本幸博「津軽方言の動詞活用体系について」(『国語学』54-1, 2003.1)は, 津軽方言動詞が全て子音語幹動詞と解釈でき, それらは活用語尾と音便形により6種類に分類でき, 活用形は9活用形を設定すべきとした。坂本には関連して「津軽方言の命令表現——命令形と丁寧命令形および希求(依頼)について——」(『日本文藝研究』55-2, 2003.9)があつた。齋藤孝滋「岩手県盛岡市方言の形容詞活用体系」(『国語論究9 現代語の位相研究』, 明治書院, 2002.1)は, 形容詞の活用体系を音現象が活用体系に及ぼす影響とあわせて分析・記述したもの。ほかに, 松丸真大「高知県幡多方言の使役形式——活用体系変化の一過程——」(『阪大日本語研究』14, 2002.3)ほかがあつた。

野田春美・日高水穂『現代日本語の文法的バリエーションに関する基礎的研究』(科研成果報告書, 2003.3)は, 共通語に見られる文法的バリエーションのうち, 否定表現に関するものを中心に上げながら, 全国4地域(東北・関東・近畿・九州)でのアンケート調査結果を参考に, 文体差・地域差・性差との関係を明らかにしようとしたもの。日本語文法の正確な記述には, 地域差も含めたバリエーションの実態研究が有効であることを示唆している。

待遇表現関係では, 中井精一「尊敬の助動詞『ハル』の成立とその定型化」(『日本近代語研究』3, ひつじ書房, 2002.3), 同「上方およびその近隣地域におけるオル系「ヨル」・「トル」の待遇化について」(『国語語彙史の研究』21, 和泉書院, 2002.3), 新子慶行「大阪府豊能郡能勢町方言における『チャ敬語法』について」(大阪教育大学『国語と教育』28, 2003.3)など, 近畿方言関係のものが多かった。

方言における係り結び現象を取り上げたものに, 大西拓一郎「方言の係り結び」(『国語論究9 現代語の位相研究』, 明治書院, 2002.1), 同「方言における『こそ～已然形』係り結び」(『国語学』54-4, 2003.10)があつた。前者は本土方言に見られる三種の係り結び「こそ～已然形」「疑問詞～已然形」「疑問文～連体形」の全国分布について, 過去の研究文献を中心に整理したもの。後者では「こそ～已然形」係り結びに絞って, 条件表現・文末表現それぞれにおける意味用法と, そうした用法が生じた変遷過程を整理し,

それが地理的分布からも裏付けられるとした。文献国語史での多くの係り結び研究と方言研究の立場からの成果との照合が今後の課題となろう。

ほかには、渋谷勝己「山形市方言の談話マーカ『ホレ・ホリヤ；アレ・アリヤ』」(『阪大社会言語学研究ノート』4, 2002.3), 櫻井真美「山形市方言順接条件表現形式『ド』の用法」(『言語科学論集』7, 2003.12), 山田敏弘「『郡上方言』の文法」(『岐阜大学教育学部研究報告 人文科学』52-1, 2003.11), 岸江信介「京阪方言にみられる動詞打消形式の差異と成立事情」(『国語語彙史の研究』22, 和泉書院, 2003.3), 瀬戸口修「種子島方言の文表現法研究——文末詞『キリヤー, キラー, ケリヤー, ケラー』について(その一)(その二)——」(『志学館大学文学部研究紀要』23-2・24-2, 2002.1・2003.1), 伊豆山敦子「琉球・宮古(平良西仲)方言の名詞語末音と語形変化」(獨協大学『マテシス・ウニヴェルサルリス』3-2, 2002.3) などがあった。

大西拓一郎編『方言文法調査ガイドブック』(科研成果報告書, 2002.3)は, 大西のほか8名の担当者が, 各自の得意分野(可能・自発, ヴォイス, テンス・アスペクト, 条件表現, 接続詞, 格助詞, モダリティ, 活用等)を中心に, 将来の方言文法調査に有効な視点, 具体項目, 資料を提示してくれている。本書を参考に, 今後さらに全国各地で詳細かつ新しい視点による方言文法研究が進むことが期待される。

6. 社会言語学

今期は方言談話を扱った研究が目についた。社会言語学的研究の進展にともない, 研究対象は語や表現レベルから談話レベルへと確実に広がりつつあると言えよう。

渋谷勝己の指導の下, 方言会話データに基づいて〈スタイル切換え〉を分析したものに, 大阪大学大学院文学研究科社会言語学研究室『阪大社会言語学研究ノート』4・5(2002.3・2003.3)があった。そこでは, 津軽方言・東京下町方言・高知県幡多方言・京都市方言・鹿児島方言の会話データを例に, 各方言に特徴的な要素について〈スタイル切換え〉の観点から分析を行うとともに, 今後の課題や展望が示されている。

ほかには, 琴鍾愛「仙台市方言における談話展開の方法——説明的場面で使用される談話標識から見る——」(『文藝研究』155, 2003.3), 越野道子「『道教え』談話における音声的特徴——「くり返し」の発話を中心に——」(『阪大日本語研究』15, 2003.2), 梅本仁美「青少年の会話に見られる非言語行動の機能について——関西在住中学生間の会話データをもとに——」(『大阪大学言語文化学』11, 2002.3), 荒則子「方言談話における計量国語学的類型論——四国・九州・沖縄地方——」(『玉藻』39, 2003.11)などもあった。

言語(方言)意識や地域性と言語行動の関係を論じたものには, 安住紘枝「北海道虻田郡虻田町における方言・共通語の切り替え意識の実態」(『大阪樟蔭女子大学日本語研究センター報告』10, 2002.3), 中井精一「日本語の地域性と心意傾向——敬語行動からみた京都人の心意傾向——」(『応用日本語研究』創刊号, 2002.10)などがあった。

井上史雄『日本語は年速一キロで動く』（講談社、2003.7）は、前半では「新方言」に関する従来の豊富な調査データを駆使して方言の持つ生命力を実証し、後半ではその分布から方言の伝播速度を推定している。新書版ではあるが、先掲の井上・鏈水『辞典〈新しい日本語〉』とともに、「新方言」研究の現時点での集大成と言えるものである。

グロットグラムの手法を用いたものに、本多真史「平行するグロットグラム——東北本線と常磐線の比較——」（『いわき明星大学大学院人文学研究科紀要』創刊号、2003.3）、真田信治・武田佳子・余健「徳島・吉野川流域におけるアクセントの現在」（『阪大日本語研究』14、2002.3）、都染直也「JR 神戸線沿線方言（姫路—大阪）の動態について——【JR 神戸線沿線グロットグラム】をもとに——」（『甲南大学紀要 文学編』123、2002.3）などがあり、グロットグラム図集には、都染と甲南大学方言研究会による『JR 山陰本線鳥取—和田山間グロットグラム集』（甲南大学方言研究会、2003.3）ほかがあった。

ほかに、朝日祥之「方言接触が生み出した言語変種に見られる言語的特徴——引用形式「ト」のゼロマーク化を例に——」（『阪大日本語研究』15、2003.2）は、神戸市内のあるニュータウン居住者における引用の「ト」の脱落現象に関わる言語内要因と言語外要因について考察し、近隣の在来者居住地域と言語内的制約条件に差異があることや、「ト」以外の引用形式とその使用場面や文法的条件等を明らかにしたものの。

陣内正敬『コミュニケーションの地域性と関西方言の影響力についての広域的研究』No.1・No.2（科研成果報告書、2003.3）のNo.1には、首都圏や中部・中国・四国・九州地方での、関西方言の使用とスピーチスタイル、関西方言への意識などに関する13氏の論考を収め、No.2には、大阪市、広島市、高知市、福岡市、名古屋市、東京・首都圏における、関西方言の影響力を見た調査データを収める。首都圏までも含んだ広い範囲で、共通語化とは異なる関西方言化の実態を明らかにしようとした点が新しい。

7. 方言地理学

まず馬瀬良雄監修『方言地理学の〈課題〉』（明治書院、2002.5）を挙げたい。日本の方言地理学の発展に尽した故グロータース神父の追悼論文集。グロータース神父の「鳥瞰的広域言語地図と微細言語地図」をはじめ29編の論考が載り、わが国の方言地理学のこれまでの歩みと現在の水準、さらには新しい方法論や課題が示される。付録に「主要方言地図目録」（大西拓一郎）、「方言地図項目一覧——主要語彙項目——」（小林隆・白沢宏枝）が収められたのも有り難い。

国立国語研究所『方言文法全国地図 第5集』（財務省印刷局、2002.6）は〈表現法編II〉として、義務・命令・禁止・希望・意志・勧誘・推量・様態・伝聞・疑問・反語・授受・あいさつの各表現法についての34項目（地図65面）が収められた。全6集の完結が近づいた今、『方言文法全国地図』による研究が今後盛んになることを期待したい。第1集の刊行から15年余りを要した地図集の一日も早い完結が待たれる。

『日本言語地図』の数値化データの因子分析・クラスター分析を適用したグラフと地理的分布パターンを、分布重心法によって描いた日本地図と照合し、標準語形の文献初出年を加えることで標準語形成立の史的傾向を見たものに、井上史雄「文献初出年と方言分布重心にみる標準語の歴史」(『国語学』54-2, 2003.4)があり、井上には関連して「方言分布重心と標準語形使用率」(『東京外国語大学論集』63, 2002.3)もあった。

また、今期は『日本言語地図』以来の規模の全国的な方言語彙の分布調査が科研「危機言語」の小林隆・篠崎晃一『消滅の危機に瀕する全国方言語彙資料』(2003.3)で行われた。調査項目は(1)『日本言語地図』を補完する項目、(2)方言地理学的調査が遅れている分野の項目、(3)先行研究で成果の上げられている項目、という三つの観点から選ばれた300項目、調査地点は1,100余り。早くから、『日本言語地図』で扱えなかった語彙の全国分布調査の緊急性と、そのための通信調査の利用を提唱してきた小林の実践である。今後の地図化と分析が待たれる。

ところで、『方言文法全国地図 第5集』に載る地図がコンピュータで描かれたことが象徴的であるように、言語地図作成の電算化に関する論考が多かったのも今期の特色であった。『日本語学』21-11(2002.9)の特集「いま言語地図を考える」に載る5氏の論考のうち、大西拓一郎「言語地図作成の電算化——『方言文法全国地図』第五集を例に——」は、『方言文法全国地図 第5集』の地図作成でイラストレータ(アドビ)を用いて電算化した方法を順序立てて説明している。このソフトを用いた方言地図作成はすでに何人かの若手研究者によって試みられていて評判もよいようだ。今後はさらにわかりやすいマニュアルが単独で作成されることを望みたい。同特集号に載る、岸江信介・木部暢子・石田祐子「声の言語地図」はパソコン画面上の言語地図から方言音声聞けるようにするシステムの報告であり、類似のものは富山大学中井研究室による『富山県音声言語地図(CD-ROM)試作版』(2002)があった。コンピュータが個人にはまだ身近でなかった20余年前のことを思うと、まさに隔世の感がある。

また、最近地理学で注目されている地理情報システム(GIS)の方言地理学への応用の試みもあった。富山大学人文学部GIS研究会『人文科学とGIS』(富山大学人文学部, 2003.3)で、中井精一「フィールド言語学とGIS——GISによる新たな方言研究の可能性とその戦略——」、大西拓一郎「方言学とGIS」らが言うように、GISの導入は方言研究を新しいパラダイムに導き、新たな分析手法を提供する可能性を感じさせる。関連して、松丸真大「言語地理学におけるGISアプリケーションの評価——MapInfo・カシミール3D・MANDARAの比較を通して——」(『地域言語』14, 2002.10)、鳥谷善史「『地理情報分析支援システム『MANDARA』』を使つての言語地図の作成——『大阪府言語地図』を作成する——」(『地域言語』14, 2002.10)などがあつた。

特定事象の地理的分布の解釈には、河内秀樹「関東北東域アクセント事象についての方言地理学的研究——二拍名詞にみる当域の傾向——」(『新大國語』29, 2003.3)、上條厚「タベ

リ・ミリ等の長野県と東濃での分布(1)(2)——中信地方とそれに連続する地域の優しい命令形と勧誘形——」(『信州大学留学生センター紀要』3・4, 2002.3・2003.3) などがあつた。また、安部清哉「関東における日本語方言境界線から見た河川地形名の重層とその背景」(『国語学』54-3, 2003.7) は、関東を横切る方言境界線と河川湖沼沢地地形名の分布から、日本語方言の重層性を考察し、それらと東アジア、さらにはモンスーン・アジア領域の言語特徴との関連を考察したスケールの大きな研究である。

方言地図集には、今村かほる『津軽・南部境界地域方言地図』(科研成果報告書, 2002.2), 都染直也編『兵庫県飾磨郡宍粟郡姫路市接地域域言語地図』(甲南大学方言研究会, 2002.3), 仙波光明・岸江信介・石田祐子編『徳島県言語地図』(徳島大学国語学研究室, 2002.11), 加藤正信・松永修一編『宮崎県方言における世代差・地域差の研究』(科研成果報告書, 2003.6) などがあつた。

8. その他

文献資料と方言分布の関係を考えてものに、遠藤仁「上方語の伝播と庄内」(『国語論究9 現代語の位相研究』, 明治書院, 2002.1) があつた。上方語文献, 地方語文献に見られる語や日本海沿岸部に分布する方言と山形県庄内方言との共通度から、日本海ルートの海上伝播の可能性を再考したもの。遠藤の言うとおりに、方言地理学では接続助詞「さかい」などの上方語が日本海ルートで伝播したと安易に言い過ぎていたのかもしれない。夏井邦男「北海道言語彙の歴史的研究——『メンコイ』とその周辺——」(国学院大学国語研究会『国語研究』66, 2003.3) は、古語メグシを出自とするメンコイの意味用法と語形変化の過程を文献国語史の立場から跡づけたもの。

彦坂佳宜「日本語方言における意志・推量表現の交渉と分化——『方言文法全国地図』の解釈——」(『国語論究9 現代語の位相研究』, 明治書院, 2002.1) は、意志・推量表現の歴史について、『方言文法全国地図』の分布と過去の方言文献例とを総合的に考察したもの。彦坂には、近世末期桑名藩士の日記に見られる家中弁の成立が、藩主の転封(移住)と集団語意識に支えられたものである可能性を論じた「桑名藩家中弁の成立と終焉——原因・理由表現の考察から——」(『国語学』54-3, 2003.7) もあつた。

ほかに、山県浩「『物類称呼』の見出し語——地域性の全体的傾向——」(福岡大学『日本語日本文学』13, 2003.12), 作田将三郎「宮城県における〈糠〉の地方語史」(『言語科学論集』7, 2003.12), 高橋俊三「『琉球二字官話集』における動詞の形態」(『沖縄文化』38-1, 2003.3), また学史的な研究に、竹田晃子「小林好日氏による東北方言通信調査」(『東北文化研究室紀要』44, 2003.3) があつた。

ところで、小・中学校や高等学校の教育現場は今、国語科や総合学習における方言学習のための分かりやすい参考書, 教材, 資料等を求めている。井上史雄・吉岡泰夫監修〈調べてみよう暮らしのことば〉シリーズ(全7巻)はそれを意識して編まれたもので、

『九州の方言』『中国・四国の方言』『近畿の方言』（ゆまに書房、2003.11）の3冊がまず刊行された。伝統的方言の代表例の紹介にとどまらず、「新しい方言」「私たちの会話を記録してみよう」「方言劇を演じてみよう」「英語の会話を方言に訳してみよう」など、内容の工夫は評価できるが、都道府県ごとにはごく一部の地域や内容しか取り上げられていない。この種のもの各都道府県版が企画されれば学校現場の利用価値もさらに高まるはずである。その点では、非売品ではあるが山田敏弘編『みんなで使おっけ！ 岐阜のことば I』（岐阜大学教育学部国語教育講座、2003.3）は、小学校高学年以上を対象に、文法項目ごとに25の課を設定して語学テキスト風に易しく解説したものであり、小・中学校の方言教材作成のために大変参考になる。国立国語研究所『ことばの地域差—方言は今—』（新「ことば」シリーズ16、財務省印刷局、2003.3）も、方言の現状についての座談会、解説と方言に関する問答集、コラムが載り、初学者、国語教育関係者等に有益な内容となっている。

市町村史誌類の方言記述には、加藤和夫「方言」（『わかさ美浜町誌 美浜の文化 第5巻 語る・歌う』福井県美浜町、2003.3）などがあつた。伝統的方言の衰退・消滅を惜しんで方言を記録・保存しようという動きは、個人・団体・行政等でますます盛んになりつつある。吉川利明他編『豊橋の方言集』（豊橋市文化市民部文化課、2002.3）は単なる語彙集ではなく、市民から募集した方言会話例や方言にまつわるエピソードを豊富に載せた楽しい読み物風のものとなっている。筆者が関わった石川県内の例でも、代表的方言百語を使った五七五調の短文とともに、その方言に関するエピソードを載せた辰口町ふるさと研究会編『たつのくち・村ことば百景』（私家版、2003.7）があつた。これらに共通するのは、地域の方言文化をわかりやすく次世代に伝えたいとの精神である。できれば研究者の支援で、この種の記録・保存が充実した内容となることを期待したい。

9. おわりに

以上、今期の「地域言語・方言」分野の研究文献について見てきた。可能な限り多くの文献に目を通す努力はしたつもりだが、見落としもあつたに違いない。筆者の力不足から、編集委員会の「大きな傾向を捉え重点的に見る」という要望にも十分応えられなかったことをお詫びしなければならない。また、限られた紙数の中で言及・紹介できなかったものも多い。本稿で取り上げるのでできなかったものについては、執筆者各位のご寛恕を請う次第である。

付記

研究文献の調査・収集にあたっては、国立国語研究所図書館の方々が大変お世話になった。記して感謝申し上げます。稿中、敬称は略させていただいた。